

白氏文集 十五 二王後

加藤 淳平

唐では歴代、少くとも白樂天の時代まで、唐の前二代の、南北朝の北朝後周の皇帝宇文氏と隋の楊氏の末裔を、國の賓客として優遇し、公式行事に参列させてゐたと申します。唐の歴代の皇帝の出た李氏は、隋の楊氏と同じく、漢族の姓を名乗つてゐますが、もともと鮮卑族であり、楊氏も、本来の鮮卑族の名の宇文氏も同様であつて、しかも三氏は互ひに姻戚關係を結んで居りましたから、そのことは分かります。しかし漢土では、二代前までの君主の子孫を禮遇するのが、「禮記」に示された儒教的慣例だつたやうです。後の時代の宋や元や明の時代になると、この慣例は守られなくなりますので、漢土にそのやうな慣例があつたことは知らない人が多いでせう。漢土の「革命」なるものは、宦官や纏足と並んで、日本人が幸ひにも漢土から受容しなかつたものですが、「革命」であつても唐の時代まではまだこんな、日本人にも違和感のない慣例があつたのです。ただ白樂天は漢土の人らしく、この慣例の政治的意義を強調し過ぎてゐるかも知れません。

二王後 明祖宗之意也 二王の後 祖宗の意を明らかにする也

二王後 彼何人 二王の後 彼れ何人ぞ

介公蝦公爲國賓 介公蝦公國賓となる

周武隋文之子孫 周武と隋文の子孫なり

古人有言天下者 古人の言へるあり 天下は

非是一人之天下 是れ 一人の天下に非ずと

周亡天下傳于隋 周亡びて 天下は隋に傳はり

隋人失之唐得之 隋人之を失ひて 唐之を得

唐興十葉歲二百 唐興りて十葉 歲二百

介公蝦公世爲客 介公蝦公 世よ客となる

明堂太廟朝享時 明堂太廟 朝享の時

引居賓位備威儀 引きて賓位に居り 威儀に備ふ

備威儀 助郊祭 威儀に備へ 郊祭を助くるは

高祖太宗之遺制 高祖太宗の遺制なり

不獨興滅國 獨り滅びたる國を興すのみならず

不獨繼絕世 獨り絶えたる世を繼がしむるのみならず

欲令嗣位守文君 位を嗣ぎ文を守る君をして

亡國子孫取爲戒 亡國の子孫を 取りて戒と爲さしめんと欲するなり

(大意) 二王の後裔とはどんな人たちなのだろうか。介公は後周の武帝の、蝦公は隋の文帝の子孫である。國の賓客となつてゐる。古人が、天下は一人の天下ではないと言つてゐる。南北朝北朝の後周が亡國となつて、隋の天下となり、隋も亦天下を喪つて、唐の天下となつた。唐が興つてから十代二百年、介公と蝦公は代々唐の賓客の待遇を受けて來た。皇帝が宮殿や太廟で行ふ儀式や祭祀の際、二人の公は、國の賓客の席に招待されて、行事の權威を高める。行事の權威を高め、行事に参加して貰ふのは、高祖と太宗の遺した制度である。それは滅びた國を復興させ、絶えた家を繼續させるだけではない。唐の帝位を嗣

ぎ文化傳統を守る君主に、亡國の子孫を見て自らの戒めとして欲しいからである。

(平成二十八年十二月二十三日受附)